

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K11086

研究課題名(和文) 月経前不快症状を緩和する健康習慣形成プログラムの構築

研究課題名(英文) Creating healthy habits program to alleviate premenstrual symptoms

研究代表者

松本 珠希 (Matsumoto, Tamaki)

四天王寺大学・教育学部・教授

研究者番号：90248047

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：回顧的・前方視的疫学調査から、85%以上の性成熟期女性が、月経前に心身違和感(月経前症候群：PMS)を経験することが明らかとなった。また、主観的不健康感とストレス感の増加、正常月経周期の逸脱、睡眠6時間未満が、性成熟期女性における月経周期に伴う不快症状増加の危険因子になりうる可能性も示唆された。また、本研究では、スマートフォンアプリ(DRSP-JAPANプラス)を導入し、研究参加者にセルフモニタリングを実施してもらった。実行率には個人差が認められたものの、基礎体温の変化と月経周期性、PMSを含めた月経随伴症状の変動を客観的に知ることができ、心身の健康維持・増進につながることを示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

PMSは月経前の黄体期に繰り返し出現する心身不快症状の集積であり、女性のQOLにも影響を及ぼす。本研究の疫学調査から、PMSの種類、発症頻度、重症度など、本邦のPMSの実態を明らかにすることができた。また、実践研究では、セルフモニタリング用アプリ「DRSP-JAPANプラス」の有効性を実証することができた。更なる改修が必要ではあるが、本デバイスにより、手軽に日々のバイオリズムの変化を認識し、心身のストレスを視覚化できることから、PMSに対する理解を深め、セルフケアへの関心と実践力を高めることが確認された。加えて、今後、「女性の活躍」に相応しい新たなヘルスプロモーション研究にも応用可能である。

研究成果の概要(英文)：A series of retrospective and prospective epidemiological surveys indicated that more than 85% of the participants of this study had some symptoms in the premenstrual phase (PMS). The surveys also revealed potential risk factors, including negative subjective perceptions of health and stress, a slight deviation from the regular menstrual cycle, and inadequate sleep duration shorter than six hours, which could worsen mind and body health conditions during the menstrual cycle. In addition, the present prospective observational study has shown that daily self-monitoring with a smartphone application (revised Japanese version of the Daily Record of Severity of Problems: DRSP-Japan plus) could serve as a useful device for reproductive-age women to recognize the menstrual cyclicity of various biopsychosocial symptoms, including PMS. This would ultimately contribute to optimal health and well-being among women with menstrual cycles.

研究分野：健康科学、行動科学、女性心身医学

キーワード：月経周期 月経前症候群 セルフモニタリング 行動変容 健康習慣形成 スマートフォン 疫学調査 e-Health

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

月経リズムの規則性は、女性の心身の健全な発育・発達と生殖能力の指標になるのだが、月経周期に関連して、女性はかなり高い確率をもって、心身違和感を体験する。特に排卵後の黄体期 (= 月経前) になると、下腹部痛、腰痛、乳房緊満感に加え、イライラする、憂鬱、涙もろくなる等の身体的・精神的症状が繰り返し出現し、集中力・意欲の低下や作業能率の低下、人間関係の悪化といった社会的行動上の問題にまで発展することもある。だが、不思議なことに、月経が始まると、種々の心身不調は弱まり、やがて消えていく。この周期性を持った女性特有の不定愁訴は、月経前症候群 (premenstrual syndrome: PMS) とよばれている<sup>1,2)</sup>。

PMS は女性なら誰もが体験する症状であり、生命に直接関わるような重大なものではないため、時期が過ぎれば治るものとこれまで軽視されてきた感もある。しかし、米国で実施された疫学調査によると、PMS を有する就労女性は、欠勤や仕事の生産性の低下を体験しており、PMS による経済的損失が年間 4,333 ドル高くなるという。PMS は女子高校生にも認められ、重症化すれば、欠席や学業不振にもつながる可能性もある<sup>1,2)</sup>。

PMS の出現期間は、黄体期の数日間~2週間とバリエーションがあるものの、顕著な症状は月経開始 6 日前に出現し始め、月経開始 2 日前にピークに達するとされる。黄体期に繰り返すという特徴をもつ PMS ではあるが、症状の種類や程度は血中性ステロイドホルモン濃度とは関係がなく、PMS を決定づける臨床検査も存在しない<sup>1,2)</sup>。つまり、症状の発現時期と月経周期との関連性を見出し、PMS の実態を把握するためには、「症状を記録する」ことから始まる<sup>2,3)</sup>。地道な自己評価ではあるが、日々の症状を記録することで、女性自身が心身の変化について認識し、本症候群を受容し共存していくことができることから、この行為自体が、認知行動療法としての役割を果たすとも考えられている<sup>2,3)</sup>。然しながら、セルフモニタリングとそれに続く健康生活習慣の形成は、PMS の緩和及び治療のための生活指導における第一段階として位置づけられているものの、その効果を長期にわたり、また客観的な指標で評価がなされていないのが現状である。

## 2. 研究の目的

本研究では、軽症から重症まで PMS 症状レベルが異なる有経女性を対象に、PMS を知る第一歩となるセルフモニタリングと継続可能な健康生活習慣の実践が、月経前不快症状の改善に繋がるか否かについて明らかにすることを目的とした。

従来、PMS セルフモニタリングについては、各種の紙媒体による症状記録用紙が、施設ごと、研究者・臨床家ごとに開発され使用されてきた。しかし、このような手法では、日々の記録の煩雑さから継続が容易ではなく、記録者と研究者間でのデータの同時共有や症状変化を視覚化 (グラフ化) するなど迅速なフィードバックもできなかった。そこで、本研究では、実臨床でのユーザビリティを実証した「月経随伴症状記録用スマートフォンアプリ (Japanese version of the Daily Record of Severity of Problems (DRSP-JAPAN))<sup>3)</sup> を導入した。ただし、セルフモニタリングに加え、基礎体温の変化、食事、運動、睡眠等の生活習慣も記録することができるよう、本アプリを改修した後、後述する前方視的実践研究に適用することにした。

本研究では、PMS を含む月経随伴症状の種類や変化のパターン等、即日的にアプリに入力されたデータを詳細に解析するとともに、健康習慣の実践が PMS 症状の緩和にどの程度寄与するかについても検討する。併せて、モニタリングを含むセルフケア行動の実践・継続を阻む要因についても、Bio-Psycho-Social の観点から多面的に評価する。

## 3. 研究の方法

本研究では、前半 3 年間 (2018~2020 年) に、PMS の実態を探るため、疫学調査を実施した。加えて、DRSP-JAPAN の改修を行い、予備実験を実施した。後半 2 年間 (2021~2022 年) には、DRSP-JAPAN の改修版「DRSP-JAPAN プラス」を導入した前方視的実践研究を実施した。

### (1) 2018 年度 回顧的疫学調査

200 名の女子大学生 (19.8 ± 0.1 歳) を対象に、PMS の発症頻度と症状の種類について調査をするとともに、PMS の重症度に影響を与える要因は何かについて探究した。月経前不快症状の評価は Menstrual Distress Questionnaire (MDQ) を用い、月経前に体験する 46 症状について、6 段階で評価してもらった。また、被験者には、主観的健康感と主観的ストレスの程度を評価してもらい、加えて、就寝時間、睡眠時間、朝食の有無、主観的な食事の栄養バランス、運動習慣の有無についても回答してもらった。

### (2) 2019 年度 回顧的疫学調査と前方視的疫学調査の比較

PMS の疫学調査では、月経前の症状を思い出して質問紙に回答するという回顧的調査が主に用いられる。しかし、そこには種々のバイアスが関与することは否めない。回顧的調査と黄体後に測定した前方視的疫学調査では、PMS 症状の種類や重症度は異なるのだろうか。

2019 年度の研究では、2018 年度の PMS 回顧的疫学調査に参加した正常月経周期 (25~38 日)

を有する 55 名を対象に、前方視的疫学調査を実施した。研究参加者には、卵胞期 (Day 5-11) と黄体後期 (月経前 7 日間) に各 1 日実験室に入室してもらった。実験当日、起床時の基礎体温の測定、早朝第一尿の採取をお願いした。また、実験室では、身長、体重、血圧の測定後、MDQ に回答してもらい、当日の 46 症状について、6 段階で評価してもらった。

### (3) 2020 年度 前方視的観察研究

2018・2019 年に実施した回顧的・前方視的疫学調査から、程度の差こそあれ、85%以上の性成熟期女性が PMS を経験することが明らかとなった。また、主観的不健康感とストレス感の増加および朝食欠食は、PMS の増悪因子となることも示唆された。朝食摂取を含む食習慣に加え、睡眠もまた女性の心身の健康維持には重要で、生活習慣の乱れは、種々の不定愁訴の発症に関与する。最適睡眠時間を明確に定義することは難しいが、睡眠時間数、起床・就寝時間は、月経周期に伴う不快症状にどの程度影響を与えるのだろうか。

2020 年度の研究では、22 名の女子大学生を対象に、月経周期 2 サイクルに亘る前方視的観察研究を実施した。研究参加者には、卵胞期 (Day 5-11) と黄体後期 (月経前 7 日間) に各 1 日、総計 4 回、実験室に入室してもらった。実験当日、起床時の基礎体温の測定、早朝第一尿の採取をお願いした。実験室では、身長、体重、血圧の測定後、46 項目から構成される MDQ に回答してもらい、月経周期に伴う身体的・心理的・社会的症状レベルを評価した。加えて、前日の就寝時間、当日の起床時間についても調査し、睡眠時間数を算出した。

### (4) 2021・2022 年度：スマートフォンアプリを用いたセルフモニタリング

2021・2022 年度の研究では、PMS を知る第一歩となるセルフモニタリングが、認知行動療法的アプローチとなり、症状の緩和につながるか否かについて検討することにした。本研究では、セルフモニタリングツールとして、妥当性と信頼性が検証された「月経随伴症状記録用スマートフォンアプリ：DRSP-JAPAN」に改良を加えた「DRSP-JAPAN プラス」を導入した。

DRSP は、身体的・精神的症状 21 項目と社会的活動・学業・仕事・対人関係等への障害に関する 3 項目、計 24 項目から構成され、症状のレベルに応じて、「全くない」から「非常に強い」まで、6 段階で評価する。DRSP-JAPAN プラスでは、上記 24 項目に加え、性器出血量、就寝・起床時間、基礎体温、朝食の有無、身体活動量(歩数)も記録することができるように改良した。本プロジェクトには女子大学生 116 名 (18-22 歳:19.40±1.2 歳) が参加し、本アプリを用いて、90 日間、心身の健康状態、生活習慣について、即日的に記録することを依頼した。なお、希望者には、研究期間後も入力を許可した。

## 4. 研究成果

### (1) 2018 年度 回顧的疫学調査

MDQ46 症状のうち、発症頻度の高い症状は、11 症状 (身体的症状 7、心理・社会的症状 4) であった。また、重回帰分析を用いて、女子大学生の月経前不快症状に影響を与える要因を探究したところ、従属変数として用いた MDQ 総計に対し、5%水準で有意な独立変数は、主観的健康感と主観的ストレス感であった。主観的健康感と主観的ストレス感の程度により、200 名の被験者を 4 群 (健康・ストレス無し、健康・ストレス有り、不健康・ストレス無し、不健康・ストレス有り) に分類したところ、自身を主観的に「不健康」かつ「ストレス有り」と評価したものは 19 名であった。このグループの女性では、「健康・ストレス無し」と評価する女性 122 名と比較し、月経前に経験する 46 症状の中で、より不快に感じ、その程度が中等度以上であったものは 9 症状あり、身体的症状に比べ、心理・社会的症状の種類が多いことが明らかとなった。加えて、「不健康・ストレス有り」群では、朝食欠食率も有意に高いことが認められた。本研究成果は、*BioPsychoSocial Medicine* に発表した<sup>4)</sup>。

### (2) 2019 年度 回顧的疫学調査と前方視的疫学調査の比較

回顧的疫学調査で発症頻度が高かった PMS 症状は、前方視的疫学調査においても認められたことから、月経前に経験する症状の種類は、概ね正確に思い出すことができると評価できた。しかし、回顧的調査の MDQ 総計が前方視的調査での MDQ 総計より有意に高く、約 20% 過大評価する可能性があることが示唆された。また、卵胞期と黄体後期に実施した前方視的 MDQ 調査結果から、30 名が Premenstrual Molimina (軽症月経前症状) 群、17 名が PMS 群に分類された。Premenstrual Molimina 群では主に身体的症状が黄体後期で顕著に増加するが、PMS 群では身体症状のみならず、より重症度の高い多数の心理・行動・社会的症状も顕著に現れ、月経前症状が多岐に亘ること、これらの症状群が、女性の月経前の心身不調と、延いては QOL の低下につながることを明らかとなった。本研究成果は、*Gynecological and Reproductive Endocrinology & Metabolism* に発表した<sup>5)</sup>。

### (3) 2020 年度 前方視的観察研究

月経周期に伴う不快症状に関連する要因を探索するため、MDQ 総計を従属変数とし、重回帰分析を行ったところ、5%水準で有意な独立変数は、年齢、月経周期、月経規則性、睡眠時間数であった。多くの性成熟期女性が経験するように、本研究においても、月経周期に伴う不快症状は黄体後期に増加した。月経規則性に関連する背景と最適な睡眠の量と質については、心理・神

経・内分泌的な観点からも詳細に探究する必要があるが、今回の前方視的観察研究からは、正常月経周期の逸脱と6時間未満の睡眠が月経周期に伴う不快症状増加の危険因子になりうる可能性が併せて示唆された。本研究成果は、*Gynecological and Reproductive Endocrinology & Metabolism* に発表した<sup>6)</sup>。

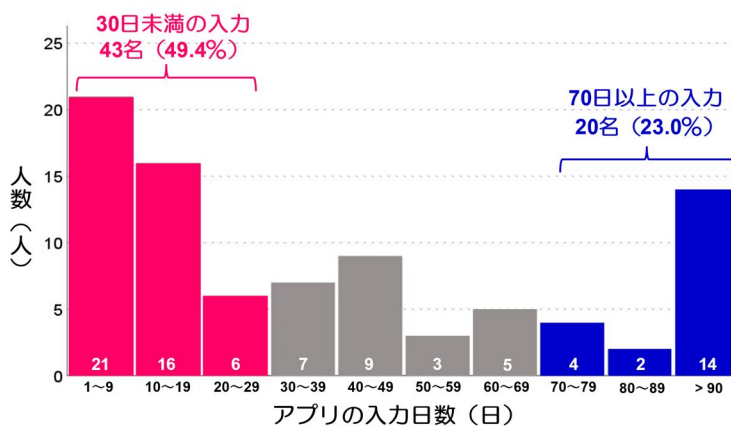
#### (4) 2021・2022年度：スマートフォンアプリを用いたセルフモニタリング

研究参加者116名中、治療中の疾患（精神科、婦人科、先天性）を有するものが4名、経口避妊薬を服用したものが7名いた。また、研究参加に同意したものの、アプリの初期登録、およびセルフモニタリングの実践をしなかったものが10名いた。加えて、アプリへの月経開始日の入力が無く、月経周期規則性の評価ができなかったものが8名存在した。したがって、本研究では、上述した29名を除外した87名に対し、月経周期性とセルフモニタリング実行率について検討をすることにした。

研究期間90日には、最大で月経周期5サイクル分の情報が含まれた（例：第1月経周期30日の27日目から記録を開始し、第2月経周期25日、第3月経周期26日、第4月経周期27日、第5月経周期28日のうち2日目で終了した場合、研究期間は4+25+26+27+8=90日間となる）。研究参加者87名のうち、研究期間内の全ての月経周期において、正常月経（25-38日）であったものは40名であった。他の47名の月経周期性については、正常月経と頻発月経（24日以下）の混合が15名、正常月経と稀発月経（39日以上）の混合が19名、正常・頻発・稀発月経の混合が8名、異常月経5名（頻発月経4名、頻発・稀発月経の混合1名）であった（表1）。

**表1 月経周期性とセルフモニタリング実行率（n=87）**

		入力日数（日）										合計 (人数)	
		1-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	>90		
月 経 周 期 性	正常月経	8	12	4	2	5	1	2	1		5	40	
	正常・異常月経	正常・頻発	7		1				2	3		2	15
		正常・稀発	5	3		2	1	2			1	5	19
		正常・頻発・稀発	1			2	2				1	2	8
	異常月経	稀発			1	1	1		1				4
		頻発・稀発		1									1
合計(人数)		21	16	6	7	9	3	5	4	2	14	87	



**図1 セルフモニタリング実行率**

アプリによるセルフモニタリング実行率については、1-9日間で21名となり、全体の24.1%が10日未満の入力となった。また、30日未満入力した参加者数の合計が約半数（計43名：全体の49.4%）を占めていたことから、月経周期1サイクル分のモニタリングを毎日続けることは、容易ではないことが示唆された。その一方で、70日以上継続してモニタリングを実行したものが20名（全体の23.0%）存在した（表1、図1）。研究参加者には、90日間の実践研究終了後も、アプリの使用を許可したところ、90日以上入力を継続した14名の中には1年以上、セルフモニタリングを実行するものもあり、最高入力日数は478日であった（90-199日：7名、200-499日：7名）。

90日間のセルフモニタリング終了後、質問紙により、モニタリングの自己評価、アプリの使用感、改善点等を調査した。なお、本質問紙調査には、87名中66名が回答した。90日間のセルフモニタリング実行性については、「全く入力しなかった（0%）」から「毎日、きちんと入力できた（100%）」として自己評価してもらったところ、66名の平均値±標準偏差は34.9±29.0%であり、実際の値36.9±32.8%（33.2/90日間記録）と有意な差は認められなかった（mean difference

-1.9, 95% confidence interval -5.5 to 1.7, p=0.290 )

90日間のセルフモニタリングの実行率には個人差があり、平均すると4割弱にとどまったが、表2に示すように、本プロジェクトを通して、月経周期にともなう心身の症状変化を客観的に知ることができ、心身の健康維持につながる事が明らかとなった。起床時の基礎体温測定も月経周期を知るうえで役立ったと回答した率が有意に高いことも認められた。加えて、就寝・起床時間、朝食の有無、歩数のアプリへの入力も、健康生活習慣の形成に寄与し、心と体を整えるきっかけになることも示唆された。

**表2 セルフモニタリングの自己評価 (n=66)**

No.	質問項目	はい	いいえ	<sup>2</sup>	P value
1	月経周期にともなう心身の症状変化の記録は心身の健康維持に役立った	54	12	26.7	< 0.001
2	基礎体温測定と記録は月経周期を知るうえで役立った	53	13	24.2	< 0.001
3	就寝・起床時間の記録は、心身の健康維持に役立った	46	20	10.2	0.001
4	朝食の有無の記録は、健康的な食生活の心がけと、心身の健康維持に役立った	51	15	19.6	< 0.001
5	歩数の記録は、運動の重要性への気づきと運動習慣の形成に役立った	54	12	26.7	< 0.001
6	本プロジェクトをさらに3ヵ月継続するか	29	37	1.0	0.325

モニタリング自己評価をした66名を、アプリ入力日数30日未満36名と30日以上30名に分けて、質問紙調査の回答を比較検討したところ、質問No.1~5の「はい」の回答率には、2群間で有意な差は認められず、モニタリングの実行率に関わらず、「DRSP-JAPAN プラス」アプリの有効性を確認することができた(表3)。

しかし、今後もアプリを用いてセルフモニタリングを継続したいと回答したものは、66名中29名に留まった。自由記述欄に記載されたアプリの使用感と90日間の振り返りを分析したところ、「質問項目が多い」との意見が多く、また、「モニタリングを忘れないように通知機能が欲しかった」との要望も認められた。参加者の入力の手間を省くため、前日のデータが翌日の記入欄に反映され、異なる部分のみを修正できるようにしたのだが、「新規入力時にはリセットして欲しい」との意見も複数寄せられた。本研究では、全研究参加者に、舌下で測定する婦人体温計と歩数計を配布し、研究期間中、活用してもらったが、「基礎体温と運動量(歩数)のアプリへの入力が負担になった」とのコメントも得られた。スマートフォンは常に携帯するアイテムにはなかったが、セルフ・ヘルスケアとPMSの改善、延いては健康維持増進に向けての行動変容を促すためには、本研究で得られた意見を反映し、より利便性の高いアプリケーションを開発しなければならぬことを認識した。

今後は、本研究で得られた月経周期に伴う症状の種類・頻度・発症パターンを詳細に分析するとともに、セルフモニタリング実行率、月経周期性、基礎体温の変動、生活習慣(朝食の有無、睡眠状態、運動量)の内容が、月経随伴症状にどのように影響を与えるのかについて深く探究し、PMSの病態解明と改善策考案の一助にしたいと考える。

**表3 セルフモニタリングの自己評価：2群間における「はい」の回答率比較 (n=66)**

No.	質問項目	30日未満 (n=36)		30日以上 (n=30)		P value
		n	%	n	%	
1	月経周期にともなう心身の症状変化の記録は心身の健康維持に役立った	28	77.8	26	86.7	0.272
2	基礎体温測定と記録は月経周期を知るうえで役立った	30	83.3	23	76.7	0.355
3	就寝・起床時間の記録は、心身の健康維持に役立った	22	61.1	24	80.0	0.081
4	朝食の有無の記録は、健康的な食生活の心がけと、心身の健康維持に役立った	27	75.0	24	80.0	0.428
5	歩数の記録は、運動の重要性への気づきと運動習慣の形成に役立った	29	80.6	25	83.3	0.514
6	本プロジェクトをさらに3ヵ月継続するか	13	36.1	16	53.3	0.124

< 引用文献 >

- 1) Matsumoto T, Asakura H, Hayashi T. *Gynecological Endocrinology* 29(1):67-73, 2013.
- 2) Matsumoto T, Asakura H, Hayashi T. *Clinical Psychosomatic Obstetrics and Gynaecology: A Patient-centred Biopsychosocial Practice*. pp. 175-198. Oxford University Press, Oxford, UK., 2017.
- 3) Ikeda Y, Egawa M, Okamoto K, Mandai M, Takahashi Y, Nakayama T. *BioPsychoSocial Medicine* 15:6, 2021.
- 4) Matsumoto T, Egawa M, Kimura T, Hayashi T. *BioPsychoSocial Medicine* 13:26, 2019.
- 5) Matsumoto T, Egawa M, Kimura T, Hayashi T. *Gynecological and Reproductive Endocrinology & Metabolism* 2(1):31-41, 2021.
- 6) Matsumoto T, Egawa M, Kimura T, Hayashi T. *Gynecological and Reproductive Endocrinology & Metabolism* 3(1): 32-38, 2022.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Tamaki Matsumoto, Miho Egawa, Tetsuya Kimura, Tatsuya Hayashi	4. 巻 13
2. 論文標題 A potential relation between premenstrual symptoms and subjective perception of health and stress among college students: a cross-sectional study	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 BioPsychoSocial Medicine	6. 最初と最後の頁 26 (1-9)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s13030-019-0167-y	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tamaki Matsumoto, Miho Egawa, Tetsuya Kimura, Tatsuya Hayashi	4. 巻 2(1)
2. 論文標題 Comparison between retrospective premenstrual symptoms and prospective late-luteal symptoms among college students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Gynecological and Reproductive Endocrinology & Metabolism	6. 最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.53260/GREM.212016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tamaki Matsumoto, Miho Egawa, Tetsuya Kimura, Tatsuya Hayashi	4. 巻 3
2. 論文標題 A relationship between menstrual phase and regularity, sleep duration and biopsychosocial symptoms among college students: a prospective observational study.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Gynecological and Reproductive Endocrinology & Metabolism	6. 最初と最後の頁 32-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.53260/grem.223015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 9件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Tamaki Matsumoto, Miho Egawa, Tetsuya Kimura, Tatsuya Hayashi.
2. 発表標題 Negative subjective perception of health and stress worsens premenstrual symptoms among college students
3. 学会等名 The 19th International Congress of the International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本珠希
2. 発表標題 【合同大会記念企画共催メッセージ】女性心身の現在未来
3. 学会等名 第2回日本心身医学関連学会合同集会（大阪中央公会堂，大阪府大阪市）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本珠希
2. 発表標題 PMS/PMDD：月経前に訪れる心と体の不協和音を探る
3. 学会等名 <一般社団法人日本うつ病センター 主催>働く女性のメンタルヘルスシンポジウム：女性のライフサイクルと女性特有のうつとの関係（AP市ヶ谷，東京都千代田区）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本珠希
2. 発表標題 PMS/PMDD：月経前に訪れる心と体の不協和音を探る - 自律神経活動動態からの考察 -
3. 学会等名 第1回女性のライフサイクルとうつ研究会（アグネスホテル東京，東京都新宿区）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本珠希
2. 発表標題 【シンポジウム：我が国の月経前不快気分障害（PMDD）の現状】PMS / PMDD研究の動向と知見
3. 学会等名 第116回日本精神神経学会総会（仙台国際センター / 東北大学川内萩ホール，宮城県仙台市）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tamaki Matsumoto, Miho Egawa, Tetsuya Kimura, Tatsuya Hayashi
2. 発表標題 [Symposium: Premenstrual disorders: what we know and what we do not know about the late-luteal enigmatic condition] To what extent and how is autonomic nervous system activity associated with the diverse psychophysiological symptoms in the premenstrual phase?
3. 学会等名 The 19th World Congress of Gynecological Endocrinology, Firenze Fiera, Firenze, Italy. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本珠希
2. 発表標題 【シンポジウム：我が国の月経前不快気分障害（PMDD）の現状】月経前特有の心身不調（PMS / PMDD）の実態を探る
3. 学会等名 第117回日本精神神経学会学術総会（国立京都国際会議場，京都府京都市）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本珠希
2. 発表標題 【シンポジウム：月経前不快気分障害（PMDD）の理解を深めるために】月経前心身不調（PMS / PMDD）に關与する生物心理社会的要因を探る
3. 学会等名 第118回日本精神神経学会学術集会総会（福岡国際会議場，福岡県福岡市）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本珠希
2. 発表標題 【シンポジウム：様々な視点からみたPMS/PMDD】PMS / PMDDの疫学および心理生理学研究の概観と今後の展望
3. 学会等名 第63回日本心身医学会総会ならびに学術講演会（幕張メッセ，千葉県千葉市）（招待講演）
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 松本珠希
2. 発表標題 【テーマ：我が国の月経前不快気分障害（PMDD）再考】「PMDD研究の動向を探る」
3. 学会等名 第35回日本女性心身医学会研修会（Web開催）（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	林 達也  (Hayashi Tatsuya)  (00314211)	京都大学・人間・環境学研究科・教授   (14301)	
研究分担者	江川 美保  (Egawa Miho)  (50600061)	京都大学・医学研究科・助教   (14301)	
研究分担者	木村 哲也  (Kimura Tetsuya)  (60533528)	神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授   (14501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------